



威厳と挑戦 大英博物館の 非文字資料から広がる風景

大西 万知子 (COE研究員・RA)

今回の「海外博物館事情」は、前回のフランスに続いて英国の博物館です。英国で、最大規模の収集品を持ち、最も多く世界各地の人々が訪れる博物館は、ロンドンのブルームズベリー地区にある大英博物館です。大英博物館の設立は古く、1683年、オックスフォードのアシュモリアン博物館の設立に続いて、下院で可決された法令によって設立された1753年、一般公開された1759年にまで遡ります。この博物館は、スローン、コットン、ハーリー氏によるコレクションが設立当初の収集品の原点と伝えられています。「日の沈む処なし」とうたわれた大英帝国の全盛期、様々な地域から集められた膨大な物の数々も、今日の博物館の収集品となっています。その収集品には、日本の漆器や陶磁器、浮世絵も数多く含まれ、日本古美術課の収蔵するものだけでも約2万5千点と報告されています。これらの多くは、17世紀後半以後、長崎の出島から、また、19世紀中期以後は、日米修好通商条約締結で開港した横浜から欧米へ海を渡っていったものです。1862年の第2回ロンドン万国博覧会では、初めて、大規模に日本の品々が展示され、1867年のパリ万国博覧会では、正式に徳川幕府が参加しています。海を渡ったこれらの品々は、西欧の人々の熱いまなざしをうけ、当時の欧米諸国の人々の服装や、絵画の技法にも影響を与えました。2001年、英国では、「Japan Festival 2001」と題して、各地で、流鏝馬や阿波踊りなどをはじめとした日本の伝統芸能や美術、文化が紹介されました。博物館においても、関連した企画展示が催されました。ここでは、大英博物館で行われた3つの企画展示に焦点をしばり、今日の英国の博物館の挑戦の姿を紹介します。

まず、1つ目は、2001年6月14日から、2002年1月13日まで行われた「Souvenirs in contemporary Japan」展です。この展示は、大英博物館民族誌学課の学芸員、Sara Pimpaneau氏の企画、研究者 Inge Daniels氏の協力により開催されました。展示されたものは、Pimpaneau氏自身が、2001年1月15日から2月6日まで、日本の各地を旅し集めたものです。展示されたものは、宮島の杓子

から温泉饅頭まで、日本各地で土産や名産として売られているものばかりです。同氏は、この展示を通じて、日本人々にとって、旅に、「おみやげ」を買うという行為が不可欠であり、旅は、写真やビデオ、そして、「おみやげ」を通じて、記録され、思い出されることができると述べています。特に、食べ物の「おみやげ」は好まれ、それは、旅の記録を残すことができると同時に、家や故郷で、旅に出た人の帰りを待っている人と、その記憶を語りあったり、一緒に味わうことで、その旅の記憶を分かちあうことができるからではないかと彼女は分析しています。私は、なにげなく、旅先で買っている「おみやげ」の存在理由に気づかされたようで、とても新鮮な印象を受けた展示でした。この展示を見て、何より、一番



© The British Museum 2001

驚いたのは、日本人自身だったかもしれません。なぜなら、ガイドブック片手に、ロゼッタ・ストーンやエジプトで発掘されたミイラを一目見ようと厳かに入った扉の向こうに、どこかで見たお饅頭が、堂々と、展示されていたのですから。

2つ目の展示は、2001年9月5日から12月2日まで行われた「Shintō: The Sacred Art of Ancient Japan」展です。この展示は、大英博物館日本古美術課、日本の文化庁、日本基金の共催によるものです。展示されたものは、縄文土器、土偶、銅鏡から彫刻、絵画にいたる約80点です。多くの品々が、日本の神社や寺院、博物館から貸し出されたものです。この展示の意図は、縄文時代からすでに見られた人々の信仰的態度である自然への畏敬の念、独創性、美意識、そして「神」(Kami)の存在を、捉えることでした。今回の展示は、幅広い年代から、そして、多くの種類から展示品が選択されていました。これらのモノを通じて、人の精神的なもの、人の内的なもの、目にみえないものを引き出そうという試みは、斬新な展示だったと感じます。日本では、普段はお互いに一緒に収蔵されることもなく、奥深く大切にしまわれているこれらのモノたち、突然に、世界各地から訪れる来館者に囲まれた展示ケースの中で、どのような話をささやきあっていたのでしょうか。

3つ目の紹介は、2001年11月14日から2002年3月3日まで行われた「LIGHT MOTIFS: An Aomori float and Japanese Kites」展です。この展示は、青森県青森市、滋賀県八日市市、大英博物館民族誌学課の共催によるものです。この展示は、青森のねぶたと八日市市の凧を、その形の多様性や美しさだけでなく、それぞれの地域に根付いた伝統芸能として、その地域とそこに暮らす人々のアイデンティティのしるしとして表現していました。この展示では、青森市から、ねぶた師とその製作チームが招待され、館内に、「源義経渡海(みなものよしつねとかい)」の紙と木で作られた人形ねぶたが紹介されました。また、天井は、八日市市で作られた、大きい凧と小さい凧で、色とりどりに飾られました。この人形ねぶたは、出来上がったものを展示する手法ではなく、その製作過程を見ることができ、その様子は、ガラスケースを通してでなく、Aomori cityとThe British Museumと書かれた小さな提灯がたくさん下げられた低い柵から見ることができました。多くの子供たちが、不思議そうに、楽しそうに、仕上がっていくねぶたを見上げていました。そして、完成もまもなくかと思われる頃、そこを

訪れてみると、灯りがともされ、命を吹き込まれたねぶたがありました。まわりを見渡すと、職人の方々が見当たりません。民族誌学課学芸員に尋ねてみると、ねぶたが完成したので帰国したとのこと。なんて粋なのでしょう。職人の方々が、あ・うんの呼吸で黙々と作業し、少しずつ、でも確実に仕上げていくその姿は、ねぶた以上に、人々を魅了していました。

これらの大英博物館で行われた3つの展示を通して気づくことは、静的で視覚的なモノとヒトの関係が中心であった博物館の展示が、動的で多感覚的な関係の中でも模索されている点です。その模索は、触れる展示、デジタル展示、映像展示という手法技術の発達によるものだけでなく、モノとヒトと、その背景にある精神世界や地域という場との関係の解明によってもなされています。モノを日常生活の、季節や年中行事のリズムの中に置いたり、また、モノを出来上がった形だけでなく、作成する、使用する、あるいは壊す過程に重点を置く展示方法は、そのモノにつながる人々の身体的記憶や風景の中へ、見る人の共感を導くことでしょう。「人類文化研究のための非文字資料の体系化」のプロジェクトの意図する人類文化のより深い理解への挑戦は、海の彼方、大英博物館でも始まっています。



© The British Museum 2001

参考資料

- Caygill, Marjorie (1999) The British Museum. A-Z companion. The British Museum.
- The British Museum (2001) LIGHT MOTIFS: An Aomori float and Japanese Kites. The British Museum.
- The British Museum (2001) Shintō: The Sacred Art of Ancient Japan. The British Museum.
- 藤野幸雄 (1975) 『大英博物館』、岩波書店